Why Do Poor People Donate More? : Effects of a Sense of Money Scarcity and Altruistic Motivation on Intention to Donate

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2021-06-28
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 竹部, 成崇
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/7071

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

なぜ貧しい人ほど寄付をするのか
－金銭的欠乏感と利他的動機づけが寄付意図に及ぼす影響－

Why Do Poor People Donate More? Effects of a Sense of Money Scarcity and Altruistic Motivation on Intention to Donate

竹　部　成　崇

要　約

社会調査ではしばしば、貧しい人の方が豊かな人よりも寄付をすることが示されている。この直感に反する現象のメカニズムを解明するため、竹部(2020)は金銭的欠乏感が寄付に関連する認知に及ぼす影響を検討した。より具体的には、金銭的欠乏感が高まると、人は他者の苦境の原因を金銭の少なさに帰属させやすくなることを示した。しかし竹部(2020)では、寄付意図を扱ってはいなかった。そこで本研究では、金銭的欠乏感が寄付意図に及ぼす影響を検討した。その際、金銭的欠乏感は「お金を自分自身のために保持しておきたい」という欲求を強めると考えられるため、金銭的欠乏感が寄付意図を高めるのは利他的動機づけが高い場合においてのみであり、利他的動機づけが低い場合には寄付意図を低めるだろうと予測した。最初の２つの実験では、探索的分析において、男性においてのみ、利他的動機づけが高い場合は金銭的欠乏感が寄付意図を高める傾向が見られた。３つ目の実験では、全体において、利他的動機づけが高い場合は金銭的欠乏感が寄付意図を高めることが示された。限界点とともに、本研究の知見が「貧しい人ほど寄付をする」という現象の理解に貢献する可能性および今後の展望について議論した。

キーワード：欠乏 , 寄付 , 利他的動機づけ , 原因帰属 , 社会経済的地位

はじめに

貧しい人と豊かな人では、どちらの方が他者にお金を分け与えるであろうか。直感的には、お金を多く持っている豊かな人の方が、他者にお金を分け与えるように思われる。しかし、社会調査ではしばしば、貧しい人の方が豊かな人より寄付をすることが示されている(e.g., Greeve, 2009; Johnston, 2005)。なぜ、このような直感に反する現象が生じるのであろうか。

近年の心理学研究は、この現象に、貧しい人の利他性の高さが関連していることを示唆している。具体的には、貧しい人は主観的社会経済的地位が低く、慢性的に外的な力を知覚しているため、他者に注意を払いやすく、結果として、苦境にいる他者に対する利他的動機づけが高まりやすいことが示されている(for reviews, Kraus et al., 2011, 2012)。それゆえ、貧しい人の方が他者を援助することは十分に予測できる。この際、合理的な観点から考えれば、金銭的援助でなく、その他の援助(e.g., 時間的援助としてのボランティア)を行うべきであろう。しかし、彼らは寄付以外の社会的援助はあまり行わない(e.g., Independent Sector, 2002; Putnam, 2001)。そのため、主観的社会経済的地位の低さに伴う利他性の高さでは、この逆説的現象を十分に説明できない。

ではなぜ、貧しい人は他者を助ける際に、わざわざ自身に不足しているお金を差し出すのであろうか。この謎を解明するため竹部(2020)は、主観的社会経済的地位の低さとは似て非なる貧しさの側面である「金銭的欠乏感」に着目した。そして、金銭的欠乏感が高まると、人は他者の苦境の原因を金銭の少なさに帰属させやすくなることを示した。しかし竹部(2020)は、他者の苦境に対する原因帰属という「寄付に関連する認知」を扱ったに過ぎない。そのため、金銭的欠乏感が実際に「寄付意図」にどのような影響を及ぼすかは明らかではない。そこで本研究では、金銭的欠乏感が寄付意図に及ぼす影響を検討した。

対立する予測

まず、金銭的欠乏感は寄付意図を高めることが考えられる。竹部(2020)は、金銭的欠乏感が高まると、人は他者の苦境の原因を金銭の少なさに帰属させやすくなることを示した。他者の苦境の原因が金銭の少なさにあるとより強く認知した場合、その他者を助けようとする際には、金銭的な援助をよ

り行おうとするであろう。そのため、金銭的欠乏感は他者の苦境の原因を金銭の少なさに帰属させる傾向を強め、結果として、寄付意図を高めることが考えられる。

しかし、金銭的欠乏感は寄付意図を低めることも考えられる。金銭的欠乏感は、当然のことながら、お金を自分自身のために保持しておきたいという欲求(以下、金銭保持欲求)を強めると考えられるためである。寄付という行為はお金を自身から手放す行為であるため、金銭保持欲求は寄付意図を低めると考えられる。このように考えると、金銭的欠乏感は寄付意図を低めるとも考えられる。

以上のように、金銭的欠乏感が寄付意図に及ぼす影響について、対立する2つの予測が成り立つ(図1)。すなわち、金銭的欠乏感が他者の苦境の原因を金銭の少なさに帰属させる傾向を強めることを考慮すると、金銭的欠乏感は寄付意図を高めると予測される。他方、金銭的欠乏感が金銭保持欲求を強めることを考慮すると、金銭的欠乏感は寄付意図を低めると予測される。そのため、金銭的欠乏感が常に寄付意図を高めることは考えにくい。それでは、どういった条件の下で、金銭的欠乏感は寄付意図を高めるのであろうか。

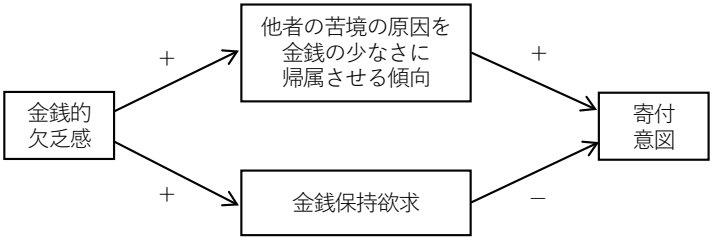

図1　金銭的欠乏感が寄付意図に及ぼす影響についての対立する予測

利他的動機づけの調整効果

この疑問について、利他的動機づけに関する研究が示唆を与えてくれる。利他的動機づけとは、他者の福利を増すという最終目標を伴う動機づけであり、共感的配慮などによって喚起する(Batson, 2010)。これまで多くの研究で、利他的動機づけが高まると、コストを払ってでも他者を援助しやすくなることが示されている(for a review, Batson, 2010)。例えばBatson et al.(1981)では、援助しないことを選択したとしても苦しんでいる他者を目撃

し続ける必要がない状況でも、共感的配慮を高められた参加者は高められなかった参加者より、苦しむ他者の代わりに電気ショックを受けるという選択をしやすいことが示された。また Fultz et al.(1986)では、援助しないことを選択した際にそれが他者に知られることがない状況でも、共感的配慮を高められた参加者は高められなかった参加者より、孤独に苦しむ他者と長い時間を過ごすことを申し出ることが示された。さらに Batson et al.(1991)では、自身の援助によって被援助者が最終的にどのようになったかを知ることができない状況でも、共感的配慮を高められた参加者は高められなかった参加者より、困っている他者の仕事の一部を負担するという選択をしやすいことが示された。これらの結果は、共感的配慮が強く喚起し、利他的動機づけが高まると、コストを払ってでも他者を援助しやすくなることを示している。

こうした利他的動機づけの効果を考慮すると、金銭的欠乏感が寄付意図に及ぼす影響は利他的動機づけによって調整されることが考えられる(図 2)。具体的には、利他的動機づけが高い場合、他者の福利を増すという最終目標

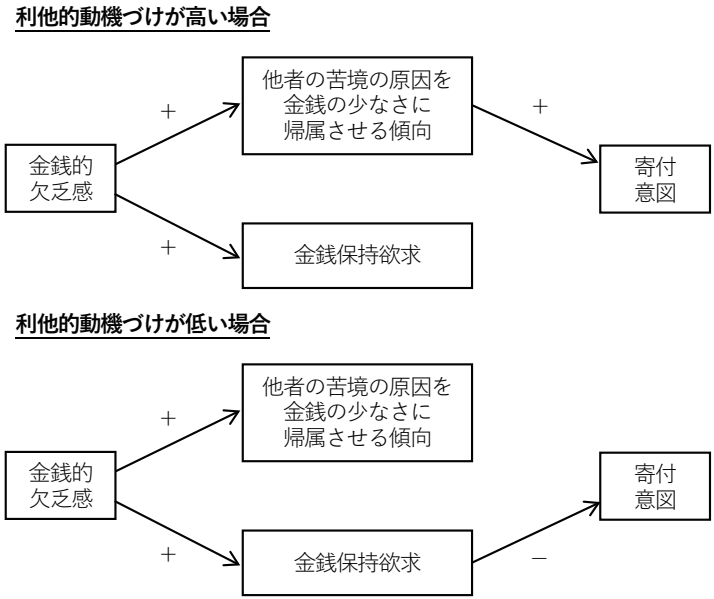

図 2　金銭的欠乏感が寄付意図に影響を及ぼすメカニズムについての仮説モデル

が活性化しているため(Batson, 2010)、金銭保持欲求が寄付意図を低める効果は弱いと考えられる。そのため、金銭的欠乏感は他者の苦境の原因を金銭の少なさに帰属させる傾向を介して、寄付意図を高めることが予測される(図2上)。他方、利他的動機づけが低い場合は、苦境にいる他者より自己を優先する。そのため、他者の苦境の原因を金銭の少なさに帰属させる傾向が寄付意図を高める効果より、金銭保持欲求が寄付意図を低める効果の方が強く、結果として、金銭的欠乏感は寄付意図を低めることが予測される(図2下)。

本研究の目的と仮説

上述の通り、利他的動機づけが高い場合には、金銭的欠乏感は他者の苦境の原因を金銭の少なさに帰属させる傾向を介して寄付意図を高めることが予測される。これと、貧しさに伴う別の感覚である「主観的社会経済的地位の低さ」が利他的動機づけを高めること(for reviews, Kraus et al., 2011; Kraus et al., 2012)を考え合わせると、「貧しい人ほど寄付をする」という逆説的現象は図3のように解釈できる。すなわち、貧しさの一側面である「主観的社会経済的地位の低さ」によって高められた利他的動機づけが、貧しさの別の側面である「金銭的欠乏感」によって強められた他者の苦境の原因を金銭の少なさに帰属させる傾向と相まって、寄付意図を高め、結果として、「貧しい人ほど寄付をする」という現象が生まれるのである。本研究では、このモデルに関して未解明な部分、すなわち、利他的動機づけが高い場合に金銭的

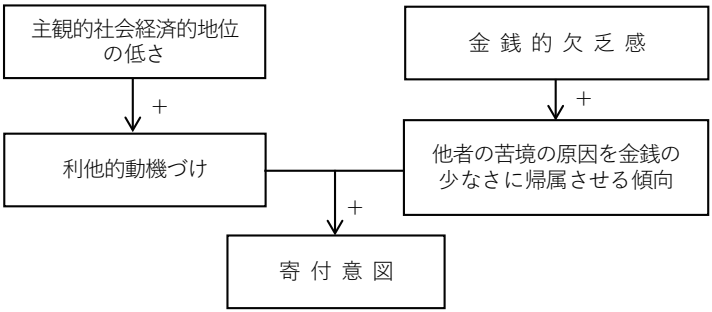

図3 「貧しい人ほど寄付をする」という現象の背後にある心理プロセスについての仮説モデル

欠乏感は寄付意図を高めるのか、という点を検討した。

その際、金銭的欠乏感の「因果的影響」を明らかにするため、金銭的欠乏感は実験的に操作した。よって仮説は、(1)利他的動機づけが高い場合、金銭的欠乏感を高められた条件の参加者の方が、高められなかった条件の参加者より、寄付意図が高いだろう、(2)利他的動機づけが低い場合、金銭的欠乏感を高められた条件の参加者の方が、高められなかった条件の参加者より、寄付意図が低いだろう、というものであった。なお、分析には統計分析ソフト HAD16_101(清水 , 2016)を用いた。

実験 1

方法

実験参加者

96 名(女性 61 名、男性 35 名)の大学生が実験に参加した。平均年齢は 18.4 歳(SD = 0.7)であった。

実験計画

2 要因の実験計画であった。第 1 要因は金銭的欠乏感であり、実験的に操作した。すなわち、参加者を金銭的欠乏感高条件あるいは金銭的欠乏感低条件にランダムに割り当てた。第 2 要因は利他的動機づけであった。こちらについては個人差を測定することとした。

手続き

大学の講義時間内に 1 冊の質問紙を各参加者に配布した。参加者にはカバー・ストーリーとして、2 つの無関連な予備調査に協力してほしいと説明した。そしてまず、「大学生の食生活に関する調査」と称した部分で、金銭的欠乏感を操作した。次に、「児童養護施設問題に関する調査」と称した部分で、他者の苦境に対する原因帰属、寄付意図、ボランティア意図、および利他的動機づけを測定した。最後に、全体に関わる質問と称した部分で、操作チェック項目、調査に関する感想、寄付およびボランティア経験等について尋ねた。全員の回答が終わった後、ディブリーフィングを行い、実験を終

了した。

金銭的欠乏感の操作

豊沢・竹橋(2015, 2016)、Toyosawa & Takehashi(2016)、および竹部(2020)と同様の方法を用いた。具体的には、参加者はまず、鈴木さんというアルバイトで生計を立てている一人暮らしの大学生についての文章を読んだ。金銭的欠乏感高条件では、鈴木さんはお金に余裕がなく、3日間で1,000円しか食費に使えないと記述されていた。金銭的欠乏感低条件では、鈴木さんはお金に余裕があり、3日間で食費に10,000円使えると記述されていた。この文章を読んだ後、参加者は、もし自分が鈴木さんの状況に置かれたら、このお金をどのように使うかを尋ねられ、3日間の食費計画を表に記入した。

他者の苦境に対する原因帰属の測定

竹部(2020)と同様の方法を用いた。具体的には、参加者はまず、運営が厳しくなってきている、ある児童養護施設についての記述を読んだ。続いて、この児童養護施設の運営が厳しい理由として、「人手不足」と「資金不足」のどちらがより重大であると思うかを尋ねられた。また、各理由がどの程度重大であるかを、それぞれ10件法(1: まったく重大でない～10: とても重大)で尋ねられた。

寄付意図・ボランティア意図の測定

児童養護施設の運営が厳しい原因について尋ねた後、まず、「このNPOにボランティア(専門家でないとできない作業ではなく、あなたにもできる作業)や寄付をお願いされた場合、あなたはどうしますか？」と尋ねた。回答の選択肢は、①ボランティアだけする、②寄付だけする、③ボランティアも寄付もする、④どちらもしない、の4つであった。分析の際には、①あるいは③を選ぶかどうかを「ボランティアする確率」、②あるいは③を選ぶかどうかを「寄付する確率」として用いた。

次に、①あるいは③を選んだ人(i.e., ボランティアすると回答した人)にのみ、合計何時間ボランティアするかを尋ねた。回答の選択肢は、約30分、約1時間、約2時間、約3時間、約4時間、約5時間、約7時間、約10時間、

約15時間、それ以上、の10個であった。分析の際には、前者から1、2、…、10と数値を振り、また、①あるいは③を選ばなかった人については0とし、この指標を「ボランティア時間」として用いた。

同様に、②あるいは③を選んだ人(i.e., 寄付すると回答した人)にのみ、何円寄付するかを尋ねた。回答の選択肢は、約100円、約200円、約300円、約400円、約500円、約700円、約1,000円、約1,500円、約3,000円、それ以上、の10個であった。分析の際には、前者から1、2、…、10と数値を振り、また、②あるいは③を選ばなかった人については0とし、この指標を「寄付金額」として用いた。

利他的動機づけの測定

寄付意図およびボランティア意図を測定した後、利他的動機づけを5項目で測定した。具体的には、「児童養護施設の子どもがかわいそうだと思った」「児童養護施設の子どものために、何かしてあげたいと思った」「この児童養護施設の子どもは、自分とは関係がないと思った(逆転項目)」「児童養護施設の子どもを思い、胸が苦しくなった」「児童養護施設の子どもと自分との間に、心理的な距離を感じた(逆転項目)」という5つの文章について、どの程度当てはまるかを、6件法(1: まったく当てはまらない～6: とてもよく当てはまる)で回答してもらった。

操作チェック項目

金銭的欠乏感の操作の有効性をチェックするために、「大学生の食生活に関する調査」(金銭的欠乏感を操作する部分)において描かれた状況に対して、どのくらい金銭的欠乏感(お金が足りないという気持ち)を感じたかを、4件法(1: まったく感じなかった～4: とても感じた)で尋ねた。

寄付およびボランティア経験の個人差の測定

寄付経験については、まず、これまでにどれくらい自発的に寄付をしたことがあるかを5件法(1: したことがない、2: 一度だけ、3: 数回した、4: しばしばする、5: よくする)で回答してもらった。分析の際には、これを「寄付経験の個人差(回数)」として用いた。

続いて、自発的な寄付経験がある人には、平均的な1回の寄付額を尋ね

た。回答の選択肢は、数十円、約 100 円、約 200 円、約 300 円、約 400 円、約 500 円、約 700 円、約 1,000 円、約 1,500 円、約 3,000 円、それ以上、の 11 個であった。分析の際には、前者から 1、2、…、11 と数値を振り、また、自発的な寄付経験がない人については 0 とし、この指標を「寄付経験の個人差(金額)」として用いた。

ボランティア経験についても同様に、まず、これまでにどれくらい自発的にボランティアに参加したことがあるかを 5 件法で回答してもらった。分析の際には、これを「ボランティア経験の個人差(回数)」として用いた。

続いて、自発的なボランティア経験がある人には、平均的な 1 回のボランティア時間を尋ねた。回答の選択肢は、数十分、約 1 時間、約 2 時間、約 3 時間、約 4 時間、約 5 時間、約 7 時間、約 10 時間、約 15 時間、約 30 時間、それ以上、の 11 個であった。分析の際には、前者から 1、2、…、11 と数値を振り、また、自発的な寄付経験がない人については 0 とし、この指標を「ボランティア経験の個人差(時間)」として用いた。

結果

操作チェック

金銭的欠乏感について、条件を独立変数とした t 検定を行った。その結果、金銭的欠乏感高条件の方が($M = 3.77$, $SE = 0.08$)金銭的欠乏感低条件より($M = 1.86$, $SE = 0.11$)、金銭的欠乏を強く感じていた($t(94) = 14.26$, $p < .001$, $d = 2.89$)。よって、操作は成功していたと考えられる。

仮説の検証

利他的動機づけを測定する 5 項目に、ある程度の内的一貫性が見られたため($\alpha = .69$)、これらを合算平均した($M = 3.93$, $SD = 0.79$)[1]。

そしてまず、寄付する確率(しない 40 名、する 56 名)について、条件[2]と利他的動機づけ、およびそれらの交互作用項を独立変数としたロジスティッ

1　条件は利他的動機づけに影響を及ぼしていなかった($t(94) = 0.29$, $p = .77$, $d = .06$)。

2　以降で行うすべての分析では、金銭的欠乏感高条件を − 0.5、金銭的欠乏感低条件を + 0.5 としている。

ク回帰分析を行った[3]。しかし、利他的動機づけの主効果のみ有意で($b = 0.67$, $SE = 0.33$, $Z = 2.01$, $p = .04$)、条件の主効果および交互作用項は有意ではなかった(Zs < 0.61, ps $> .54$)。

次に、寄付金額($M = 3.08$, $SD = 3.31$)について、条件と利他的動機づけ、およびそれらの交互作用項を独立変数とした重回帰分析を行った。しかし、こちらについても、利他的動機づけの主効果のみ有意で($b = 1.00$, $SE = 0.44$, $t(89) = 2.26$, $p = .03$)、条件の主効果および交互作用項は有意ではなかった(ts$(89) < 0.83$, ps $> .41$)。

これらの結果は、寄付経験の個人差の効果を統制しても大きく変わらなかった。よって、仮説は支持されなかった。

前提の確認

本研究の仮説は、竹部(2020)で示された「金銭的欠乏感は他者の苦境の原因を金銭の少なさに帰属させる傾向を強める」という知見に基づいていた。そこで次に、この前提が本実験において成り立っていたかどうかを検証した。

まず、児童養護施設の運営が厳しい理由として「人手不足」と「資金不足」のどちらがより重大であると選択するかと条件の関連性を検討するために、χ^2検定を行った。その結果、有意な関連は見られなかった($\chi^2(1) = 0.41$, $p = .52$)。

次に、各理由が原因としてどの程度重大であるかについて、条件(金銭的欠乏感高／金銭的欠乏感低)×理由の種類(人手不足／資金不足)の2要因混合計画の分散分析を行った。その結果、理由の種類の主効果が有意であり、資金不足の方が($M = 8.56$, $SE = 0.16$)人手不足より($M = 8.09$, $SE = 0.17$)重大であると評定されていた($F(1, 94) = 4.51$, $p = .04$, $\eta_p^2 = .05$)。しかし、条件の主効果および交互作用は非有意であった(Fs$(1, 94) < 0.36$, ps $> .55$, η_p^2s $< .004$)。

このように、条件は他者の苦境に対する原因帰属に影響を及ぼしていなかったことから、本実験においては、仮説の前提が成り立っていなかったこ

3 以降で行う交互作用項を含む分析では、説明変数はすべて中心化している。また、ロジスティック回帰分析を行う場合は、不均一分散を補正する頑健標準誤差を用いている。

とが考えられる。

探索的分析

調査に関する感想において、2名の女性参加者から、実家に暮らしていたり、お金に困った経験がなかったりするため、食費計画を考える課題において困ったという記述が見られた。記述はしていなかったものの、他の女性参加者においても同様の事態が生じており、女性においては条件操作が有効でなかった可能性がある[4]。そこで、探索的に、性別を考慮に入れた分析を行った。

まず、寄付する確率について、条件と利他的動機づけと性別、およびそれらの交互作用項を独立変数としたロジスティック回帰分析を行った。その結果、2次の交互作用が有意であった($b = 3.21$, $SE = 1.61$, $Z = 1.99$, $p = .05$)。下位検定を行った結果、男性においては条件×利他的動機づけの交互作用が10%水準で有意であったのに対し($b = -2.13$, $SE = 1.25$, $Z = 1.70$, $p = .09$)、女性においては非有意であった($b = 1.08$, $SE = 1.01$, $Z = 1.07$, $p = .29$)。男性において条件×利他的動機づけの交互作用が10%水準で有意であったため、男性における条件の効果を、利他的動機づけの平均±1*SD*地点において検討した。その結果、有意ではなかったものの、利他的動機づけが低い場合には、金銭的欠乏感高条件の方が低条件より寄付する確率が低い一方($b = 1.92$, $SE = 1.25$, $Z = 1.55$, $p = .12$)、利他的動機づけが高い場合には、金銭的欠乏感高条件の方が低条件より寄付する確率が高い($b = -1.43$, $SE = 1.26$, $Z = 1.14$, $p = .25$)というパターンが見られた。有意ではなかったものの、このパターンは、仮説と一致するものであった。なお、この結果は、寄付経験の個人差(回数)の効果を統制しても大きく変わらなかった。

次に、寄付金額について、条件と利他的動機づけと性別、およびそれらの交互作用項を独立変数とした重回帰分析を行った(図4)。その結果、こちらについても、2次の交互作用が有意であった($b = 3.82$, $SE = 1.89$, $t(85) = 2.02$, $p = .05$)。下位検定を行った結果、男性においては条件×利他的動機づけの交互作用が10%水準で有意であった一方($b = -2.71$, $SE = 1.53$, $t(85)$

4　ただし、操作チェックの指標について、条件×性別の分散分析を行ったところ、交互作用は有意とならなかった($F(1, 92) = 0.64$, $p = .43$, $\eta_p^2 = .01$)。そのため、条件操作の有効性に性差があったという直接的な証拠を得ることはできなかった。

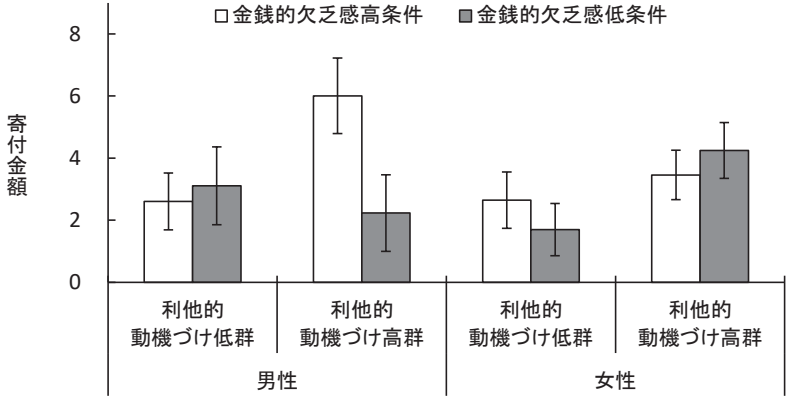

図4　性別・利他的動機づけの高低（$M \pm 1SD$）・条件ごとの寄付金額の予測値
注）得点範囲は0～10。エラーバーは標準誤差を示す。

$= 1.77$, $p = .08$）、女性においては非有意であった（$b = 1.10$, $SE = 1.10$, $t(85) = 1.00$, $p = .32$）。男性において条件×利他的動機づけの交互作用が10%水準で有意であったため、男性における条件の効果を、利他的動機づけの平均±1SD地点において検討した。その結果、利他的動機づけが高い場合には、金銭的欠乏感高条件の方が低条件より寄付金額が有意に高かった（$b = -3.77$, $SE = 1.73$, $t(85) = 2.18$, $p = .03$）。他方、有意ではなかったものの、利他的動機づけが低い場合には、金銭的欠乏感高条件の方が低条件より寄付金額が低いというパターンが見られた（$b = 0.51$, $SE = 1.56$, $t(85) = 0.33$, $p = .75$）。男性におけるこの結果は、仮説(1)を支持するものであり、仮説(2)に沿うパターンであった。なお、寄付経験の個人差（金額）の効果を統制しても結果は大きく変わらなかった。

ボランティアする確率（しない60名、する36名）およびボランティア時間（$M = 2.21$, $SD = 3.09$）については、2次の交互作用が有意となることはなく（$b = -0.36$, $SE = 1.41$, $Z = 0.25$, $p = .80$; $b = -0.47$, $SE = 1.79$, $t(88) = 0.27$, $p = .79$）、寄付意図についての分析で示された傾向は確認されなかった。よって、条件は援助行動全般に影響を及ぼしていたわけではなく、寄付意図にのみ影響を及ぼしていたことが示唆される。性別・利他的動機づけの高低・条件ごとのボランティア時間の予測値を図5に示す。なお、これらの結

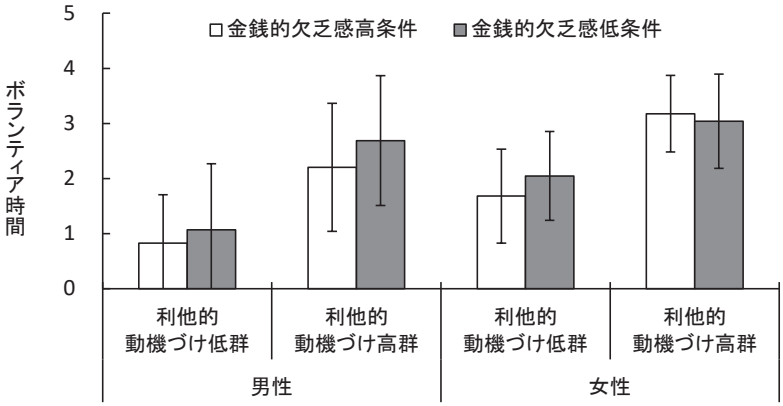

図5　性別・利他的動機づけの高低（$M \pm 1SD$）・条件ごとのボランティア時間の予測値
注）得点範囲は0～10。エラーバーは標準誤差を示す。

果は、ボランティア経験の個人差の効果を統制しても、大きく変わらなかった。

原因帰属についても、探索的に、性別を考慮に入れた分析を行ってみた。まず、児童養護施設の運営が厳しい理由として「人手不足」と「資金不足」のどちらがより重大であると選択するかと条件の関連性について、性ごとに分析を行った（表1）。その結果、男性においては、金銭的欠乏感低条件（38.9%）より金銭的欠乏感高条件（76.5%）の方が「資金不足」を選択する割合が有意に高かった（$\chi^2(1) = 5.04$, $p = .02$）。他方、女性においては有意差は見られなかった（$\chi^2(1) = 0.79$, $p = .37$）。この結果は、男性においてのみ、仮説の前提が成り立っていたことを示唆するものであった。

次に、各理由が原因としてどの程度重大であるかについて、条件（金銭的欠乏感高／金銭的欠乏感低）×理由の種類（人手不足／資金不足）×性別の3要因混合計画の分散分析を行った。しかし、2次の交互作用は非有意であり（$F(1, 92) = 0.97$, $p = .33$, $\eta_p^2 = .01$）、こちらの指標については、男性においても女性においても、仮説の前提が成り立っていたことを示唆する結果は得られなかった。

表1 性別・条件・選択肢ごとの参加者の人数

男性

	人手不足	資金不足	合計
金銭的欠乏感高条件	4	13	17
金銭的欠乏感低条件	11	7	18
合計	15	20	35

女性

	人手不足	資金不足	合計
金銭的欠乏感高条件	15	15	30
金銭的欠乏感低条件	12	19	31
合計	27	34	61

考察

男性においては、仮説(1)を概ね支持する結果が得られた。すなわち、利他的動機づけが高い場合には、金銭的欠乏感を高められた条件の参加者の方が、高められなかった条件の参加者より、寄付する確率が高いというパターンが見られ、寄付金額が有意に高かった。この結果は、利他的動機づけが高い場合には、金銭的欠乏感が寄付意図を高めることを示すものであった。

仮説(2)を支持する結果は男性においても得られなかった。ただし、これと一致するパターンは確認された。すなわち、利他的動機づけが低い場合には、金銭的欠乏感を高められた条件の参加者の方が、高められなかった条件の参加者より、寄付する確率が低く、寄付金額が低いというパターンが見られた。有意とならなかった理由として、床効果が生じていたことが考えられる。すなわち、寄付意図がどれほど低い場合でも、0円未満を選択することはできないために、条件間の差が現れにくかった可能性が考えられる。

なお、寄付意図についての分析で示された傾向は、ボランティアする確率やボランティア時間といったボランティア意図の指標においては確認されず、寄付意図に特有の傾向であった。また、仮説の前提となっていた、「金銭的欠乏感は他者の苦境の原因を金銭の少なさに帰属させる傾向を強める」という現象も、一部の指標においてではあるものの、確認された。

他方、女性においては、仮説を支持する結果は全く得られず、仮説の前提が成り立っていたことを示唆する結果も得られなかった。直接的な証拠は

ないものの、この理由として、本実験では条件操作が女性において有効でなかった可能性が考えられる。本実験では、3日間の食費計画を1,000円あるいは10,000円で考えてもらうことで、金銭的欠乏感を操作した。しかし、感想にあったように、おおよその食事や食材の費用がわからない場合や、食費に困った経験がない場合は、本実験の操作の有効性が低下する可能性がある。また、自炊経験が豊富で節約術を心得ている人においても、有効性が低下する可能性がある。さらに、もし女性は男性より必要な食事量が少ないとすると、金銭的欠乏感高条件において女性が感じる欠乏は、男性が感じるそれよりも弱くなる可能性もある。本実験においてこれらの可能性が生じていたかどうかは明らかではないが、ここまで用いてきた操作方法には、こうしたリスクが存在しうる。

そこで実験2では、別の方法で金銭的欠乏感を操作する。具体的には、8,000円あるいは40,000円で、友人と2人での1泊2日の旅行計画を立ててもらう。また、回答の際には選択肢を設けることとする。旅行計画という題材を用いることで、食費計画の場合のように性別によって必要量が異なり、それが操作の有効性に影響する可能性を低減できると考えられる。また、選択肢を設けることで、知識の程度が操作の有効性に影響する可能性を低減できると考えられる。

実験2

方法

実験参加者

大学生131名(女性101名、男性30名)が参加した。なお、分析には留学生を除いた130名(女性100名、男性30名)を用いた。平均年齢は19.5歳($SD = 1.5$)であった。

実験計画

2要因の実験計画であった。第1要因は金銭的欠乏感であり、実験的に操作した。すなわち、参加者を金銭的欠乏感高条件あるいは金銭的欠乏感低条件にランダムに割り当てた。第2要因は利他的動機づけであった。こちらに

ついては個人差を測定することとした。

手続き

大学の講義時間内に1冊の質問紙を各参加者に配布した。参加者にはカバー・ストーリーとして、2つの無関連な予備調査に協力してほしいと説明した。そしてまず、「旅行計画の立て方に関する調査」と称した部分で、金銭的欠乏感の操作を行った(詳細は後述)。次に、実験1と同様に、「児童養護施設問題に関する調査」と称した部分で、他者の苦境に対する原因帰属、寄付意図、ボランティア意図、および利他的動機づけを測定した。ただし、利他的動機づけを測定する項目のうち、「児童養護施設の子どもと自分との間に、心理的な距離を感じた(逆転項目)」という項目は表現がわかりにくい可能性があるため、「児童養護施設の子どもと自分は、似ていると思った」に変更した。最後に、実験1と同様に、全体に関わる質問と称した部分で、金銭的欠乏感の操作チェックのための質問や、寄付およびボランティア経験の個人差に関する質問等を行った。全員の回答が終わった後、ディブリーフィングを行い、実験を終了した。

金銭的欠乏感の操作

参加者はまず、友人と2人で1泊2日の旅行に行く約束をしている鈴木さんという大学生についての文章を読んだ。金銭的欠乏感高条件では、鈴木さんはお金に余裕がなく、宿と食事に8,000円しか使えないと記述されていた。金銭的欠乏感低条件では、鈴木さんは旅行券が当たったため、宿と食事に40,000円使えると記述されていた。実際に用いた文章は以下の通りである(ゴシック体太字の箇所の［ ］外が金銭的欠乏感高条件で用いたもの、［ ］内が金銭的欠乏感低条件で用いたものである)。

> 鈴木さんは大学生です。今度の連休に友人と2人で、1泊2日で温泉街に旅行に行く約束を、夏休み前からしていました。**ところが、計画を立てる段階で、鈴木さんはその頃お金に余裕がなく、どれだけ頑張っても宿と食費に8,000円しか使えないことに気がつきました［ラッキーなことに、友人と応募した8万円の旅行券が当たったため、2人は宿と食費に1人4万円使えることになりました］**。友

人は、鈴木さんに合わせてくれると言っています。

この文章を読んだ後、参加者は、もし自分が鈴木さんの状況に置かれたら、このお金をどのように使うかを、表３の選択肢から選び、表４のような表に記入するよう指示された。なお、記入の時間としてまず４分間設け、４分間経過後、終わった人には次の「児童養護施設に関する調査」へ進むよう指示した。終わっていない人には、引き続き旅行計画の記入を続け、終わり次第、次へ進むよう指示した。

表３　実験２において金銭的欠乏感の操作で提示された選択肢

宿の選択肢	
２人で15畳の和室	１人12,000円、エアコンあり、露店風呂付客室（温泉）、大浴場なし
２人で12畳の和室	１人10,000円、エアコンあり、大浴場３種類あり（温泉）
２人で８畳の和室	１人7,800円、エアコンあり、大浴場あり（温泉）
２人で４畳の和室	１人4,800円、築40年、エアコンなし、部屋風呂のみ（温泉ではない）、不衛生（ホコリっぽく，カビらしきものも見える）
ネットカフェ	１人2,000円、シャワーなし、ベッドなし（椅子とテーブルのみ）

食事の選択肢	
現地の高級な和食屋のコース料理（9,000円）	現地の高級な洋食屋のコース料理（9,000円）
現地の人気店のコース料理（6,000円）	現地の人気店の定食（3,500円）
現地の平凡なお店の定食（1,500円）	全国チェーン店の定食（1000円）
コンビニのお弁当（600円）	コンビニのおにぎり（１つ150円）

表４　実験２において金銭的欠乏感の操作で用いられた表

		内容 *例）２人で８畳の和室*	予算 *例）7,800円*
１日目	昼食		円
	夕食		円
	宿		円
２日目	朝昼兼用の食事		円
		合計（**8,000円**以内）	円

注）金銭的欠乏感低条件では、太字下線の箇所が40,000円となっていた。

結果

操作チェック

金銭的欠乏感について、条件を独立変数とした t 検定を行った。その結果、金銭的欠乏感高条件の方が($M = 3.41$, $SE = 0.11$)金銭的欠乏感低条件より($M = 1.45$, $SE = 0.08$)、金銭的欠乏を強く感じていた($t(128) = 14.69$, $p < .001$, $d = 2.57$)。よって、操作は成功していたと考えられる。

仮説の検証

利他的動機づけを測定する5項目の内的一貫性を確認したところ、$\alpha = .53$ と低かった。そこで、他の4項目すべてと相関のなかった1項目(i.e.,「児童養護施設の子どもと自分は、似ていると思った」)を除いて、最小二乗法・斜交回転による探索的因子分析を行ったところ、2つの因子に分かれた。第1因子は「児童養護施設の子どもを、かわいそうだと思った」「児童養護施設の子どもを思い、胸が苦しくなった」の2項目で構成されていたため、これを合算平均し、感情的反応因子と命名した($r = .62$, $p < .001$, $M = 3.86$, $SD = 1.25$)。第2因子は「児童養護施設の子どものために、何かしてあげたいと思った」「児童養護施設の子どもは、自分とは関係がないと思った」の2項目で構成されていたため、これを合算平均し、利他的動機づけ因子と命名した($r = .27$, $p < 01$, $M = 3.83$, $SD = 1.13$)[5]。感情的反応因子には、利他的動機づけだけでなく、援助しなければならないプレッシャーが弱い場面では援助を低下させる「個人的苦痛」が含まれている可能性を考慮し(Batson, 2010)、以降の分析では、利他的動機づけ因子を利他的動機づけの指標として用いた[6]。

まず、寄付する確率(しない60名、する70名)について、条件と利他的動機づけ、およびそれらの交互作用項を独立変数としたロジスティック回帰分析を行った。しかし、利他的動機づけの主効果のみ有意で($b = 0.38$, $SE = 0.16$, $Z = 2.34$, $p = .02$)、条件の主効果および交互作用項は有意ではな

---

5 条件は、感情的反応因子にも、利他的動機づけ因子にも、影響を及ぼしていなかった($t(127) = 0.45$, $p = .65$, $d = .08$; $t(128) = 0.45$, $p = .65$, $d = .08$)。

6 感情的反応因子を用いて同様の分析を行っても、以降で示すような条件の効果は見られなかった。

かった（Zs < 0.60, ps > .55）。

次に、寄付金額（M = 3.19, SD = 3.58）について、条件と利他的動機づけ、およびそれらの交互作用項を独立変数とした重回帰分析を行った。しかし、こちらについても、利他的動機づけの主効果のみ有意で（b = 0.86, SE = 0.27, t(126) = 3.14, p < .01）、条件の主効果および交互作用項は有意ではなかった（ts(126) < 0.27, ps > .80）。

これらの結果は、寄付経験の個人差の効果を統制しても大きく変わらなかった。よって、仮説は支持されなかった。

前提の確認

本研究の仮説は、竹部（2020）で示された「金銭的欠乏感は他者の苦境の原因を金銭の少なさに帰属させる傾向を強める」という知見に基づいていた。そこで次に、この前提が本実験において成り立っていたかどうかを検証した。

まず、児童養護施設の運営が厳しい理由として「人手不足」と「資金不足」のどちらがより重大であると選択するかと条件の関連性を検討するために、χ^2検定を行った。その結果、「資金不足」を選択する割合は金銭的欠乏感低条件（46.4%）より金銭的欠乏感高条件（70.5%）において有意に高かった（$\chi^2(1) = 7.71$, $p < .01$, 表5）。この結果は、本実験の仮説の前提が成り立っていたことを示唆するものであった。

表5　条件および選択肢ごとの参加者の人数

	人手不足	資金不足	合計
金銭的欠乏感高条件	18	43	61
金銭的欠乏感低条件	37	32	69
合計	55	75	130

次に、各理由が原因としてどの程度重大であるかについて、条件（金銭的欠乏感高／金銭的欠乏感低）×理由の種類（人手不足／資金不足）の2要因混合計画の分散分析を行った（図6）。その結果、条件の主効果は非有意（F(1, 128) = 0.68, p = .41, η_p^2 = .01）、理由の種類の主効果は有意であり、資金不足の方が（M = 8.80, SE = 0.11）人手不足より（M = 8.24, SE = 0.12）重大であると評定されていた（F(1, 128) = 12.23, p < .001, η_p^2 = .09）。より重要なこと

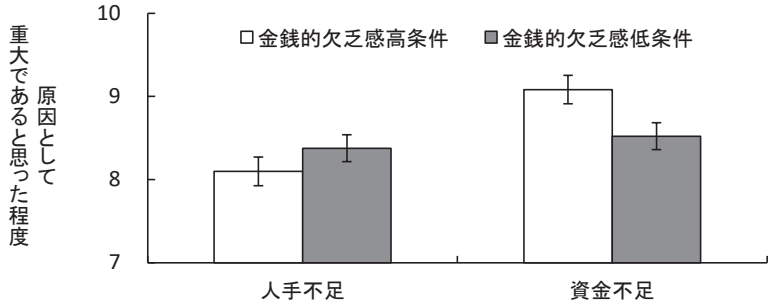

図６　条件および理由の種類ごとの「原因として重大である」と思った程度
注）得点範囲は１～10。エラーバーは標準誤差を示す。

に、交互作用が有意であった($F(1, 128) = 6.75$, $p = .01$, $\eta_p^2 = .05$)。単純主効果分析の結果、金銭的欠乏感高条件の方が($M = 9.08$, $SE = 0.17$)金銭的欠乏感低条件より($M = 8.52$, $SE = 0.16$)、「資金不足」という理由をより重大であると評定していた($F(1, 256) = 5.66$, $p = .02$, $\eta_p^2 = .04$)。この結果は、本実験の仮説の前提が成り立っていたことを示唆するものであった。「人手不足」については、金銭的欠乏感高条件の方が($M = 8.10$, $SE = 0.17$)金銭的欠乏感低条件より($M = 8.38$, $SE = 0.16$)重大でないと評定する傾向が見られたが、その差は有意ではなかった($F(1, 256) = 1.40$, $p = .24$, $\eta_p^2 = .01$)。

探索的分析

本実験では仮説の前提が成り立っていたにも関わらず、仮説を支持する結果が得られなかった。そこで、探索的に、性別を考慮に入れた分析を行った。実験１では、男性においてのみ、仮説を支持する結果が得られたためである。

まず、寄付する確率について、条件と利他的動機づけと性別、およびそれらの交互作用項を独立変数としたロジスティック回帰分析を行った。しかし、２次の交互作用は有意とならなかった($b = 2.03$, $SE = 1.31$, $Z = 1.55$, $p = .12$)。ただし、寄付経験の個人差(回数)の効果($b = 0.61$, $SE = 0.21$, $Z = 2.88$, $p < .01$)を統制したところ、２次の交互作用が10%水準で有意となった($b = 3.10$, $SE = 1.82$, $Z = 1.70$, $p = .09$)。下位検定を行った結果、男性においては条件×利他的動機づけの交互作用が10%水準で有意であった

のに対し（$b = -3.02$, $SE = 1.79$, $Z = 1.69$, $p = .09$）、女性においては非有意であった（$b = 0.08$, $SE = 0.36$, $Z = 0.23$, $p = .82$）。男性において条件×利他的動機づけの交互作用が10%水準で有意であったため、男性における条件の効果を、利他的動機づけの平均±1*SD*地点において検討した。その結果、利他的動機づけが高い場合には、金銭的欠乏感高条件の方が低条件より寄付する確率が10%水準で高かった（$b = -4.56$, $SE = 2.47$, $Z = 1.85$, $p = .06$）。他方、有意ではなかったものの、利他的動機づけが低い場合には、金銭的欠乏感高条件の方が低条件より寄付する確率が低かった（$b = 2.24$, $SE = 2.04$, $Z = 1.10$, $p = .27$）。これらの結果は、仮説(1)を支持するものであり、仮説(2)と一致するパターンであった。

次に、寄付金額について、条件と利他的動機づけと性別、およびそれらの交互作用項を独立変数とした重回帰分析を行った（図7）。しかし、2次の交互作用は有意とならなかった（$b = 0.93$, $SE = 1.47$, $t(122) = 0.63$, $p = .53$）。また、こちらについては、寄付経験の個人差（金額）の効果（$b = 0.34$, $SE = 0.13$, $t(119) = 2.61$, $p = .01$）を統制しても、2次の交互作用が有意となることはなかった（$b = 0.93$, $SE = 1.46$, $t(119) = 0.64$, $p = .53$）。ただし、男性におけるパターンは、仮説と一致するものであった。すなわち、利他的動機づけが低い場合には、金銭的欠乏感高条件の方が寄付金額が低く、利他的動機づけが高い場合には、金銭的欠乏感高条件の方が寄付金額が高いというパターンが見

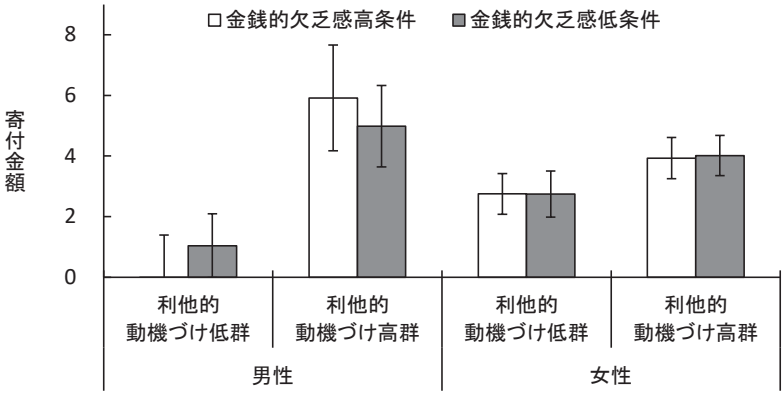

図7　性別・利他的動機づけの高低（*M* ± 1*SD*）・条件ごとの寄付金額の予測値
注）得点範囲は0～10。エラーバーは標準誤差を示す。

られた。

ボランティアする確率(しない 64 名、する 66 名)およびボランティア時間(M= 3.13, SD= 3.40)については、2 次の交互作用が有意となることはなく(b= −1.14, SE= 0.93, Z= 1.23, p=.22; b= −1.36, SE= 1.30, t(122) = 1.05, p=.30)、寄付意図についての分析で示された傾向は確認されなかった。よって、条件は援助行動全般に影響を及ぼしていたわけではなく、寄付意図にのみ影響を及ぼしていたことが示唆される。性別・条件・利他的動機づけの高低ごとのボランティア時間の予測値を図 8 に示す。なお、これらの結果は、ボランティア経験の個人差の効果を統制しても、大きく変わらなかった。

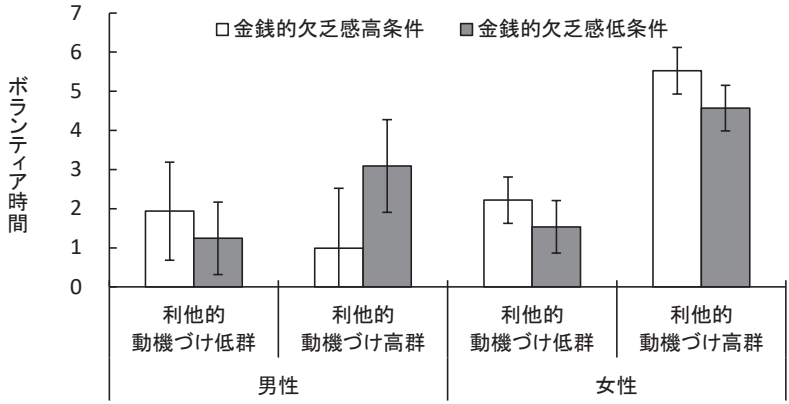

図 8　性別・利他的動機づけの高低（$M \pm 1SD$）・条件ごとの
ボランティア時間の予測値
注）得点範囲は 0 ～ 10。エラーバーは標準誤差を示す。

原因帰属についても、探索的に、性別を考慮に入れた分析を行ってみた。まず、児童養護施設の運営が厳しい理由として「人手不足」と「資金不足」のどちらがより重大であると選択するかと条件の関連性について、性ごとに分析を行った(表 6)。その結果、男性においては、有意ではなかったものの、金銭的欠乏感低条件(41.2%)より金銭的欠乏感高条件(53.9%)の方が「資金不足」を選択する割合が高かった($\chi^2(1) = 0.48$, p=.49)。女性においても、金銭的欠乏感低条件(48.1%)より金銭的欠乏感高条件(75.0%)の方が「資金不足」を選択する割合が高かった($\chi^2(1) = 7.61$, $p < .01$)。

次に、各理由が原因としてどの程度重大であるかについて、条件(金銭的

表6　性別・条件・選択肢ごとの参加者の人数

男性

	人手不足	資金不足	合計
金銭的欠乏感高条件	6	7	13
金銭的欠乏感低条件	10	7	17
合計	16	24	30

女性

	人手不足	資金不足	合計
金銭的欠乏感高条件	12	36	48
金銭的欠乏感低条件	27	25	52
合計	39	61	100

欠乏感高／金銭的欠乏感低）×理由の種類（人手不足／資金不足）×性別の3要因混合計画の分散分析を行った。しかし、2次の交互作用は非有意であった（$F(1, 126) = 0.18, p = .67, \eta_p^2 = .001$）。

これらから、本実験の仮説の前提となる「金銭的欠乏感が他者の苦境の原因を金銭の少なさに帰属させる傾向を強める」という現象は、性別に関わらず生じていたことが示唆される。

考察

男性においては、仮説(1)を概ね支持する結果が得られた。すなわち、利他的動機づけが高い場合には、金銭的欠乏感を高められた条件の参加者の方が、高められなかった条件の参加者より、寄付する確率が高い傾向が見られ、寄付金額が高いというパターンが見られた。この結果は、利他的動機づけが高い場合には、金銭的欠乏感が寄付意図を高めることを示すものであった。

仮説(2)を支持する結果は男性においても得られなかった。ただし、これと一致するパターンは確認された。すなわち、利他的動機づけが低い場合には、金銭的欠乏感を高められた条件の参加者の方が、高められなかった条件の参加者より、寄付する確率が低く、寄付金額が低いというパターンが見られた。有意とならなかった理由として、床効果が生じていたことが考えられる。すなわち、寄付意図がどれほど低い場合でも、0円未満を選択すること

はできないために、条件間の差が現れにくかった可能性が考えられる。

なお、寄付意図についての分析で示された傾向は、ボランティアする確率やボランティア時間といったボランティア意図の指標においては確認されず、寄付意図に特有の傾向であった。

他方、女性においては、仮説を支持する結果は全く得られなかった。本実験では、仮説の前提となる「金銭的欠乏感が他者の苦境の原因を金銭の少なさに帰属させる傾向を強める」という現象は、性別に関わらず生じていたことから、女性においては、他者の苦境の原因を金銭の少なさに帰属させる傾向が寄付意図に影響を及ぼしにくかった可能性が考えられる。この原因について、直接的な証拠はないものの、寄付意図の測定方法に問題があったことが考えられる。これまで寄付意図やボランティア意図を測定する際には、児童養護施設を運営するNPOにボランティアや寄付をお願いされた場合にどうするか、と尋ねていた。しかし、説得に関する研究では、女性は男性より説得の影響を受けやすいことが示されている(Eagly & Carli, 1981; McGuire, 1968; 上野 , 1994)。そのため、児童養護施設を運営するNPOにボランティアや寄付を「お願いされた場合に」どうするかというように、ボランティアや寄付を行うことを説得されているような文脈において尋ねると、女性においては金銭的欠乏感の操作の影響が生じにくいことが考えられる。そこで実験3では、寄付意図やボランティア意図を尋ねる際に、「NPOに依頼された場合」という文脈を除いて尋ねることとする。

実験3

方法

実験参加者

大学生83名(女性23名、男性60名)が実験に参加した。なお、分析には留学生を除いた82名(女性23名、男性59名)を用いた。平均年齢は20.9歳(SD = 3.1)であった。

実験計画

2要因の実験計画であった。第1要因は金銭的欠乏感であり、実験的に操

作した。すなわち、参加者を金銭的欠乏感高条件あるいは金銭的欠乏感低条件にランダムに割り当てた。第2要因は利他的動機づけであった。こちらについては個人差を測定することとした。

手続き

大学の講義時間内に1冊の質問紙を各参加者に配布した。参加者にはカバー・ストーリーとして、2つの無関連な予備調査に協力してほしいと説明した。まず実験2と同様に、「旅行計画の立て方に関する調査」と称した部分で、金銭的欠乏感を操作した。次に実験2と同様に、「児童養護施設問題に関する調査」と称した部分で、寄付意図、ボランティア意図、および利他的動機づけを測定した。ただし、本実験では、寄付意図・ボランティア意図を尋ねる際に、「NPOにお願いされた場合」ではなく、「NPOがボランティアや寄付を募っているところを見かけた場合」どうするかを尋ねた。また、実験2において条件操作が原因帰属に影響を及ぼすことが確認されたため、本実験では原因帰属については尋ねなかった。加えて、利他的動機づけを測定する項目のうち、「児童養護施設の子どもと自分は、似ていると思った」という項目は、実験2において他の全項目と相関がなかったことを考慮し、本実験では除いた。最後に、実験1,2と同様に、全体に関わる質問と称した部分で、金銭的欠乏感の操作チェックのための質問や、寄付およびボランティア経験の個人差に関する質問等を行った。全員の回答終了後、ディブリーフィングを行い、実験を終了した。

結果

操作チェック

金銭的欠乏感について、条件を独立変数としたt検定を行った。その結果、金銭的欠乏感高条件の方が($M = 3.57$, $SE = 0.11$)金銭的欠乏感低条件より($M = 1.50$, $SE = 0.10$)、金銭的欠乏を強く感じていた($t(79) = 13.72$, $p < .001$, $d = 3.03$)。よって、操作は成功していたと考えられる。

仮説の検証

利他的動機づけを測定する4項目に、ある程度の内的一貫性が見られたた

め（α =.69）、これらを合算平均した（M= 4.11, SD= 1.02）[7]。

まず、寄付する確率（しない 32 名、する 49 名）について、条件と利他的動機づけ[8]、およびそれらの交互作用項を独立変数としたロジスティック回帰分析を行った。その結果、条件の主効果が非有意（b= −0.50, SE= 0.52, Z= 0.97, p=.33）、利他的動機づけの主効果が 10% 水準で有意（b= 0.98, SE= 0.52, Z= 1.88, p=.06）、交互作用項が 10% 水準で有意となった（b= −1.82, SE= 1.04, Z= 1.74, p=.08）。交互作用が 10% 水準で有意であったため、下位検定を行ったところ、利他的動機づけが高い場合には、金銭的欠乏感高条件の方が低条件より寄付する確率が有意に高かった（b= −1.41, SE= 0.62, Z= 2.28, p=.02）。また、有意ではなかったものの、利他的動機づけが低い場合には、金銭的欠乏感高条件の方が低条件より寄付する確率が低かった（b= 0.41, SE= 0.84, Z= 0.48, p=.63）。これらの結果は、仮説（1）を支持するものであり、仮説（2）と一致するパターンであった。

次に、寄付金額（M= 3.40, SD= 3.33）について、条件と利他的動機づけ、およびそれらの交互作用項を独立変数とした重回帰分析を行った（図 9）。その結果、条件の主効果が非有意（b= −1.12, SE= 0.78, t(76) = 1.43, p=.16）、利他的動機づけの主効果が有意（b= 1.92, SE= 0.78, t(76) = 2.45, p=.02）、交互作用が非有意であった（b= −1.69, SE= 1.57, t(76) = 1.08, p=.28）。交互作用は非有意であったものの、パターンとしては、利他的動機づけが高い場合の金銭的欠乏感高条件の寄付金額が突出しており、利他的動機づけ高群における条件の効果は有意であった（b= −1.96, SE= 0.85, t(76) = 2.31, p=.02）。これは、仮説（1）を支持する結果であった。利他的動機づけ低群における条件の効果は非有意であった（b= −0.27, SE= 1.32, t(76) = 0.21, p=.84）。よって、仮説（2）は支持されなかった。

なお、これらの結果は、寄付経験の個人差の効果を統制しても大きく変わらなかった。よって、寄付する確率と寄付金額の結果を考え合わせると、仮説（1）は概ね支持され、仮説（2）は支持されなかったといえる。

7 念のため、最小二乗法・斜交回転による探索的因子分析を行ったが、1 つの因子にまとまった。また、条件は利他的動機づけに影響を及ぼしていなかった（t(78) =0.80, p=.43, d=.18）。

8 本実験では、利他的動機づけの平均が 4.11 であり、理論的中央値の 3.5 より 0.6 以上大きいことから、利他的動機づけを連続変量ではなく、3.5 以下の参加者を低群、3.5 より大きい参加者を高群とした、2 値変数として用いた。

ボランティアする確率（しない 56 名、する 25 名）およびボランティア時間（$M = 1.62$, $SD = 2.70$）については、交互作用が有意となることはなく（$b = 0.99$, $SE = 1.58$, $Z = 0.63$, $p = .53$; $b = 0.48$, $SE = 1.30$, $t(76) = 0.37$, $p = .71$）、寄付意図についての分析で示された傾向は確認されなかった。よって、条件は援助行動全般に影響を及ぼしていたわけではなく、寄付意図にのみ影響を及ぼしていたことが示唆される。条件および利他的動機づけの高低ごとのボランティア時間を図 10 に示す。なお、これらの結果は、ボラ

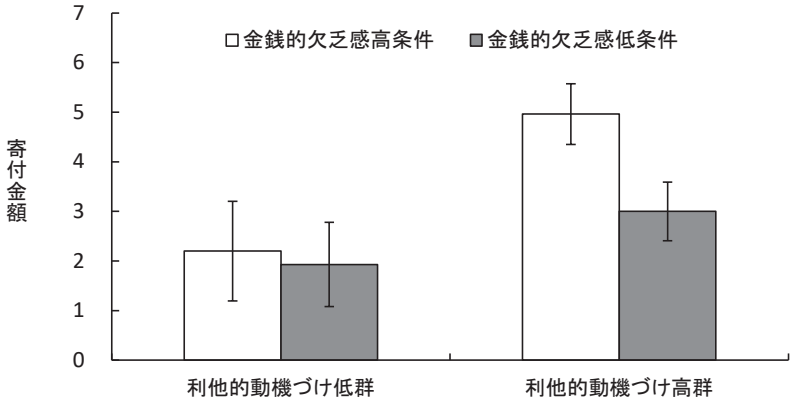

図 9　利他的動機づけの高低および条件ごとの寄付金額の予測値
注）得点範囲は 0 ～ 10。エラーバーは標準誤差を示す。

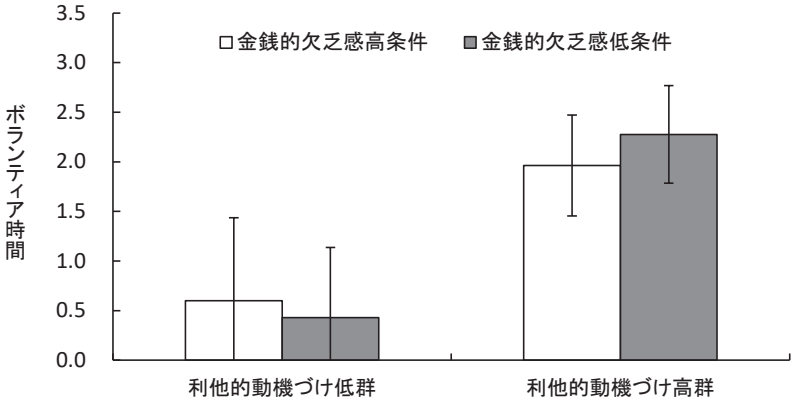

図 10　利他的動機づけの高低および条件ごとのボランティア時間の予測値
注）得点範囲は 0 ～ 10。エラーバーは標準誤差を示す。

ンティア経験の個人差の効果を統制しても、大きく変わらなかった。

考察

本実験の結果、仮説(1)を支持する結果が得られた。すなわち、利他的動機づけが高い場合には、金銭的欠乏感を高められた条件の参加者の方が、高められなかった条件の参加者より、寄付する確率が有意に高く、寄付金額も有意に高かった。この結果は、利他的動機づけが高い場合には、金銭的欠乏感が寄付意図を高めることを示すものであった。

他方、仮説(2)を支持する結果は得られなかった。寄付する確率については、仮説(2)とパターンは一致していたものの、寄付金額についてはパターンすら一致していなかった。すなわち、利他的動機づけが低い場合、寄付する確率については、金銭的欠乏感を高められた条件の参加者の方が高められなかった条件の参加者より低いというパターンが見られたものの、寄付金額についてはこれと反対のパターンが見られた。仮説(2)が支持されなかった理由として、床効果が生じていたことが考えられる。すなわち、寄付意図がどれほど低い場合でも、0円未満を選択することはできないために、条件間の差が現れにくかった可能性が考えられる。

なお、寄付意図についての分析で示された傾向は、ボランティアする確率やボランティア時間といったボランティア意図の指標においては確認されず、寄付意図に特有の傾向であった。

総合考察

本研究の目的は、金銭的欠乏感が寄付意図に及ぼす影響を検討することであった。金銭的欠乏感および利他的動機づけに関する先行研究の知見(Batson, 2010; 竹部 , 2020)を基に、(1)利他的動機づけが高い場合、金銭的欠乏感を高められた条件の参加者の方が、高められなかった条件の参加者より、寄付意図が高いだろう、(2)利他的動機づけが低い場合、金銭的欠乏感を高められた条件の参加者の方が、高められなかった条件の参加者より、寄付意図が低いだろう、と予測していた。

仮説(1)は、実験1,2においては男性においてのみ、概ね支持された。寄付意図の測定方法を修正した実験3においては、男性と女性を合わせた全参加者において、概ね支持された。探索的分析の結果も含んでおり、頑健な知

見ではないため、今後の追試研究が必要とされるが、これらの結果は、利他的動機づけが高い場合には金銭的欠乏感が寄付意図を高めることを示唆するものであった。

仮説(2)は実験1～3のいずれにおいても支持されなかった。これは床効果が生じていたためであることが考えられる。すなわち、寄付意図がどれほど低い場合でも、0円未満を選択することはできないために、条件間の差が現れにくかった可能性が考えられる。日本のように寄付文化が根付いていない場合、利他的動機づけが低い場合には、そもそも寄付意図が非常に低くなるため、金銭的欠乏感が金銭保持欲求の上昇を介して寄付意図を低める効果は検出されにくいのかもしれない。

本研究の意義

本研究の知見は、貧しさと寄付のパラドクスについて残っていた「なぜ、貧しい人は他者を助ける際に、わざわざ自身に不足しているお金を差し出すのか」という謎の解決に寄与する。竹部(2020)では、金銭的欠乏感が他者の苦境の原因を金銭の少なさに帰属させる傾向を強めることが示されていた。本研究ではこれと利他的動機づけに関する知見(for a review, Batson, 2010)を基に、利他的動機づけが高い場合には、金銭的欠乏感が寄付意図を高めるだろうと予測し、それを示唆する結果を得た。これと、貧しさに伴う別の感覚である「主観的社会経済的地位の低さ」が利他的動機づけを高めること(for reviews, Kraus et al., 2011, 2012)を考え合わせると、貧しい人が他者を助ける際にわざわざ自身に不足しているお金を差し出すのは、彼らが他者の苦境の原因を金銭の少なさに帰属させやすいためであることが考えられる。このように人の非合理性に関する謎の解明に寄与する本研究は、合理性だけでは説明できない複雑な働きをする人の心に対する理解を進めるものであろう。

また、本研究の知見は、欠乏感に関する研究の知見を拡大しうる。欠乏感に関する従来の研究の多くは、欠乏感が個人の課題遂行に及ぼす影響を検討してきた(for a review, Mullainathan & Shafir, 2013)。それに対し、本研究で示された結果は、欠乏感が、別の要因により喚起した動機づけと相まって、対人・社会的行動にも影響を及ぼす可能性を示唆している。欠乏はお金だけでなく「時間」や「人との繋がり」など多様な資源について生じうるこ

とを考慮すると(Mullainathan & Shafir, 2013)、本研究の知見は、人の様々な行動を説明・予測する視点を提供しうるであろう。そのような意味でも、金銭的欠乏感が寄付意図に及ぼす影響を検討した本研究には、一定の意義があると思われる。

限界点と今後の展望

上記のような意義があるものの、本研究には限界点も多く存在する。第1に、本研究で報告された結果には探索的分析の結果も含まれており、金銭的欠乏感が寄付意図を高めるという知見は頑健とは言えない点である。今後の追試研究で知見の頑健性を確認することが望まれる。

第2に、本研究で扱っていたのはあくまで「寄付意図」であり、「寄付行動」そのものではない点である。本研究で測定していた寄付意図は、どの実験においても寄付経験の個人差と関連していたため(寄付する確率と寄付経験の個人差(回数): rs > .26, ps < .05, 寄付金額と寄付経験の個人差(金額): rs > .31, ps < .001)、実際の寄付行動とまったく無関連ではないと考えられる。しかし、実際の寄付行動を測定した場合にも、本研究の結果が再現されるかどうかは明らかでない。そのため、実際の寄付行動を用いた実験を行って知見の妥当性を高めることも、今後は必要であろう。

第3に、金銭的欠乏感が寄付意図を高めるプロセスについては検討されていない点である。本研究では、他者の苦境の原因を金銭の少なさに帰属させる傾向が寄付意図を高めると想定していたが、これについては本研究では検討されていない。今後の研究での検討が望まれる。

今後の展望としては、本研究の視点が金銭以外の資源にも適用可能か検討することが挙げられる。本研究の視点を基にすると、例えば、「時間的欠乏を感じている人は、他者を助けようとする際に、時間的援助を行いやすいだろう」「人との繋がりの欠乏を感じている個人は、他者を苦しめようとする際に、その人を孤独にすることによって苦しめようとするだろう」という予測が導出できる。今後の研究において、こうした本研究の視点から導かれる仮説を検証することで、多様な文脈における人の行動やその背後にある心理に対する理解が深まるであろう。

引用文献

Batson, C. D. (2010). *Altruism in humans*. Oxford University Press(バトソン C. D. 菊池章夫・二宮克美（訳）(2012). 利他性の人間学－実験社会心理学からの回答 新曜社)

Batson, C. D., Batson, J. G., Slingsby, J. K., Harrell, K. L., Peekna, H. M., & Todd, R. M. (1991). Empathic joy and the empathy-altruism hypothesis. *Journal of Personality and Social Psychology*, **61**(3), 413-426.

Batson, C. D., Duncan, B. D., Ackerman, P., Buckley, T., & Birch, K. (1981). Is empathic emotion a source of altruistic motivation?. *Journal of Personality and Social Psychology*, **40**(2), 290-302.

Eagly, A. H., & Carli, L. L. (1981). Sex of researchers and sex-typed communications as determinants of sex differences in influenceability: A metaanalysis of social influence studies. *Psychological Bulletin*, **90**(1), 1-20.

Fultz, J., Batson, C. D., Fortenbach, V. A., McCarthy, P. M., & Varney, L. L. (1986). Social evaluation and the empathy–altruism hypothesis. *Journal of Personality and Social Psychology*, **50**(4), 761-769.

Greve, F. (2009, May 23). America's poor are its most generous donors. *The Seattle Times*. http://www.seattletimes.com/nation-world/americas-poor-are-its-most-generous-donors/

Independent Sector (2002). *Giving and volunteering in the United States, 2001 survey*. Washington: Independent Sector.

Johnston, D. C. (2005, December 19). Study shows the superrich are not the most generous. *The New York Times*. http://www.nytimes.com/2005/12/19/us/study-shows-the-superrich-are-not-the-most-generous.html

Kraus, M. W., Piff, P. K., & Keltner, D. (2011). Social class as culture: The convergence of resources and rank in the social realm. *Current Directions in Psychological Science*, **20**(4), 246-250.

Kraus, M. W., Piff, P. K., Mendoza-Denton, R., Rheinschmidt, M. L., & Keltner, D. (2012). Social class, solipsism, and contextualism: How the rich are different from the poor. *Psychological Review*, **119**(3), 546-572.

McGuire, W. J. (1968). Personality and susceptibility to social influence. In E. F. Borgatta & W. W. Lalmbert (Eds.), *Handbook of Personality Theory and Research*. Chicago: Rand McNally, pp.1130-1187.

Mullainathan, S., & Shafir, E. (2013). *Scarcity: Why having too little means so much*. Times Books.（ムッライナタン S.・シャフィール E. 大田直子（訳）(2015). いつも「時間がない」あなたに－欠乏の行動経済学 早川書房）

Putnum, R. D. (2001). *Bowling alone: The collapse and revival of American community*. New York: Simon and Schuster.(パットナム R. D. 柴内康文（訳）(2006). 孤独

なボーリング－米国コミュニティの崩壊と再生 柏書房）
清水裕士（2016）. フリーの統計分析ソフト HAD：機能の紹介と統計学習・教育、研究実践における利用方法の提案 . メディア・情報・コミュニケーション研究 , **1**, 59-73.
竹部成崇（2020）. 貧しさと寄付のパラドクスに対する新たな視点－金銭的欠乏感が他者の苦境の原因を金銭の少なさに帰属させる傾向を強める－. コミュニケーション文化論集 , **18**, 65-85.
豊沢純子・竹橋洋毅（2015）. 生活史と貧困プライミングが割引品の購入意図に与える影響 . 日本社会心理学会第 56 回大会発表論文集 , 45.
Toyosawa, J. & Takehashi, H. (2016). *Poor mindset and preference to discount foods: A life history theory approach.* The 17th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology, San Diego, CA.
豊沢純子・竹橋洋毅（2016）. 生活史と貧困プライミングが割引品の購入意図に与える影響（2）. 日本社会心理学会第 57 回大会発表論文集 , 154.
上野徳美（1994）. 説得的コミュニケーションに対する被影響性の性差に関する研究 . 実験社会心理学研究 , **34**(2), 195-201.